

## PCP 改革に関する提言

## PCP 将来計画ワーキンググループ：

東山哲也（代表）、榊原均、西村いくこ、坂本亘、杉本慶子

学術誌ならびに学術誌を取り巻く状況は、急激に変化している。Plant & Cell Physiology 誌（以下、PCP）を取り巻く状況についても、10年前から現在を見れば、劇的に変化したことは明らかである。PCP は日本植物生理学会の根幹であると言える。次の10年、あるいは5年先を見越し、PCP をより良いものにするための改革を進めることが、日本植物生理学会の国際化と、より一層の活性化に対しても重要である。

## 学術誌の国際的動向の概要と分析

学術誌の国際動向としては、まず植物系のトップジャーナルである Plant Cell の分析を進めると（参考資料 1）、国際共著論文の増加が明らかである（ただし中国からの論文は逆の傾向にある）。また、中国をはじめとして、台湾、オーストラリアといったアジア・オセアニア諸国の台頭も顕著である。数字には表れていないものの、タイやベトナムにおける植物科学の発展も著しく、今後もこの傾向は継続すると推察される。これらのことは、ジャーナルの国際化を怠れば、ハイインパクトな論文を十分に集められないことを示唆している。また、アジアからの投稿をいかに取り込むかも、大きな課題であることがわかる。

また、有力誌の姉妹誌の増加により、論文をどの学術誌に投稿するかの判断基準も変化しつつある。有力誌に採択に至らなかった論文がその姉妹誌に採択されることにより、重要な論文を PCP に取り込む機会が減少することになる。こうした動向への対策、いわゆる「カスケード対策」についても検討が必要である。

植物系の他誌のインパクトファクター（IF）戦略を見ると、例えば Molecular Plant は Cell Press に加わることで IF が上昇している。論文数を絞り、招待により良質な論文を集めたことも功を奏している。New Phytologist は企画号や Editorial を増やすなどし、IF の分母を小さく、分子を大きくする努力が認められる。IF に固執する必要はないと考えるが、テクニカルに IF を上げることは、良質な論文が自然と集まる正のスパイラルを生み出すために重要であろう。

学術誌の国際的地位の向上は出版社の力量に大きく依存する面があるものの、その原動力は質の高い論文の投稿であり、投稿先として魅力を持つ雑誌であり続けるための努力をし続けることが大切である。PCP は学会誌であることから、その発展は本学会の方針や会員の研究活動と切り離して考えることは不可能である。学生やポストドクが集まり活躍する活発な学会活動を、PCP とその編集に関わる研究者が軸となって生み出していくことが望ましい。

世界的に完全オンライン化やオープンアクセス化が進んでいるように、出版形態は今後大きく変貌していくと考えられるが、変化が速く予想も難しい。本質を見失わず、柔軟に変化に対応してゆける編集システムの構築が重要であろう。また、有力誌の多くは、Twitter など、Social Networking Service (SNS) を介した情報発信により、読者を獲得している。

## PCP の現状と分析

PCP の現状を分析すると（参考資料 2）、第一に国内からの投稿が大きく減少している点が目につく。世代交代により、PCP にいわゆるシンパシーを感じる層が減っていることが懸念される。PCP には、2つの重要な側面がある。一つは、学会誌としての側面である。PCP は日本植物生理学会の学会員にメリットのあるジャーナルとしての役割を負い、国内研究者の良質な研究を発表する場として重要である。もう一つは、国際的に認知されるジャーナルとしての側面である。これら両面のバランスをとることは今後も必要であり、両面をいかに強化するかが重要である。

また、以前は植物ホルモンなどの得意分野で他誌と差別化できたが、現在は特徴が薄れたことが否めない。日本が現在得意とする分野を前面に押し出す特徴づけが重要である。例えば、現状ではデータベース特集号が PCP の特徴づけに貢献している。

Rapid Paper の枠は、設置当初は PCP の IF を押し上げ、PCP の特徴の一つであった。しかし現在では採択までの時間がかかるなど、意味が薄れつつある状況である。一方で、以前設置されたテクニカル論文の枠

は PCP の IF を下げたが、こうした試行錯誤も重要な意味をもつと考える。常に改革を進めることで、PCP の IF を押し上げるとともに、重要な論文が集まる環境を作ることを目指し続けるべきである。

SNS による情報発信については、現在は Oxford University Press (OUP) blog のうち PCP に関するものについて、PCP ホームページの New Items 欄にリンクが貼られるのみであり、他誌に大きく溝をあけられている状況である。早急な対策が望まれる。

## 提言

以上の状況と分析等を踏まえ、本ワーキンググループは以下の PCP 改革を提言する。

### 1. エディターについて

**概要：**エディター（編集実行委員；Editors）の人数を増やし、勃興する分野を含む広い各野で、国際的にも強いエディターを多く登用する。担当する論文数と分野を絞ることで各エディターの負担を減らすとともに、エディターインチーフ（編集長）が目指す方針のもとエディターに創造的な活動を促し、特徴ある PCP への刷新を目指す。エディターの創造的活動により、良質な論文を国際的に集めるとともに、日本の得意分野を発信する力を高める。これにより、内容面で他誌との差別化をはかる。

1-1. エディターは広く分野をカバーすることを前提に、各分野に国際的知名度の高い研究者を登用する。さらに PCP の特徴づけのために、勃興する新分野や、成長が著しい分野のエディターを積極的に登用する。

1-2. エディターの着任時や、当該分野において特段の進展などがあった場合には、エディターに分野の紹介を兼ねた記事を執筆してもらう。これにより PCP の特徴づけにつなげる。

1-3. 慣例としてエディターの任期 4 年（2 年 2 期）が終わると再任はなかったが、得意分野の継続性など、必要に応じて任期 4 年を超えた任用を行う。

1-4. エディターは歴史的論文のアーカイブ化、それに合わせた歴史の紹介（Editorial, Letters）など、自由度をもって、創造的活動を促進することが望まれる。

1-5. エディターの人数を増やすため、また、外国人エディターと日本人エディターが同等の立場で編集活動に取り組むことを促すため、謝金は固定額から、基本支給額にハンドリング数等の貢献度に応じた金額を併せたものへ移行することが望ましい。

1-6. PCP を積極的にサポートする外国人エディターを増やすことも重要である。外国人エディターとの連携強化に、年会を利用する。外国人エディターに PCP や植物生理学会の活動や方針を理解してもらうことを通じて、海外からの良質な論文の確保を図るほか、国内からの良質な論文の投稿数を向上させ、その成果を発信するといった活動に期待する。

1-7. エディターに PCP への投稿を促すための効果的なインセンティブを検討することが望ましい。

1-8. 特集号における国内外からのゲストエディター（若手を含む）は今後も積極的に登用し、PCP に関係する研究者を増やす。

1-9. PCP 特集号を前提とした PCP 企画または学会本部企画のシンポジウムを今後も積極的に開催する。欧米・アジア諸国との連携とも連動させる。

1-10. 現行の規程・細則に定められた兼任禁止（日本植物生理学会細則第 8 条-2）に関して、学会の法人化による諸制度の変更や、エディターインチーフがエディターの担当する論文数を制限できることなどから、今後は「常任理事」と「エディター（編集実行委員）」の兼務については必ずしも禁止する必要はないと考える。

1-11. 編集委員 (Advisory Editorial Board) の制度は現状維持でよいが、PCP 編集委員会の開催の必要性や、任期の開始時と終了時の明確なアナウンスについて検討することを望む。国内外の編集委員に対し、任期を通じて、以下にあるように **Twitter** を活用してもらうなど、PCP への関わりやシンパシーが増すような運営が重要である。

1-12. 国際会議やシンポジウムのセッションのスポンサー支援を行うことで、この先注目度の高まるトピックの総説や特集号の企画を行う。

## 2. コンテンツ・情報発信について

**概要：**ハイインパクトな論文が集まるさらなる環境づくりに加え、日本植物生理学会の会員のさらなる活躍の場にすることを目指す。コンテンツおよび情報発信に関する新しい取り組みを、常に他の学術誌に先駆けて考え続けることが重要であるが、現時点では以下の取り組みについて検討すべきである。

2-1. **Rapid Paper** に代わる、迅速な審査を保証する枠を新設する。そのために、エディターおよび編集委員が中心となって、外部審査員だけに依存しない審査を行う。この枠の位置づけとしては、「特に新規性が高く興味深い研究内容の論文を対象」という、現在の **Rapid Paper** と同じものとする。なぜ迅速な発表である必要があるのかについて、例えば他誌での審査履歴があればカバーレターへの添付を受け付けるなど、投稿者に対して従来よりも具体的な理由の提示を促す。この枠で審査を進めるか、**Regular Paper** であれば審査を受け付けるか、エディターが判断・連絡をしやすいシステムを作ることも重要である。このような迅速な出版につながる枠は、PCP の特徴となる重要な枠である。迅速な審査を保証するという改革を十分にアピールするため、**Rapid Paper** の名称変更の可能性も含めて、情報発信戦略の検討を期待する。

2-2. **Editorial** を新設し、エディターインチーフやエディターからの発信や、研究者からの発信（例えば端的に新しい発見を報告し現在のモデルがどう新しく変わるか述べる）など、活発かつ多様な情報発信に役立てる。

2-3. PCP に論文を掲載した若手研究者（ポスドク・院生など）をエンカレッジし、キャリアアップにもつなげることができる広報手段として、掲載論文の第 1 著者を JSPP あるいは PCP のホームページで著者紹介する等、ウェブを活用した新しい取り組みを期待する。

2-4. 投稿時のフォーマット規定を緩め、他誌からの受け皿となりやすい環境をつくる。

2-5. PCP 独自の **Twitter** を開設することが必要である。これをもとに、みんなのひろばの **Twitter** フォロワーへの情報発信も容易となる。エディターや編集委員によるツイートも期待される。また、若手教員、ポスドク、博士課程大学院生などの委員を認定し、開設した **Twitter** を活性化することも検討に値する。

2-6. 完全オンライン化およびオープンアクセス化については、現状維持でよい。すなわち完全オンライン化は、**supplementary data** の増加など、論文形態の変化が著しいこともあり、このまま進めていく。オープンアクセス化は、それを目指す立場で、引き続き出版社や国内情勢の推移を注視する。

以上、エディターおよびコンテンツ・情報発信に関する改革を骨格とした PCP 改革により、PCP がさらに魅力溢れる雑誌に発展することを期待する。